文字の文化史

藤枝晃

江苏工业学院图书馆
藏书章

同時代ライブラリー
83

文字の文化史

藤枝晃

岩波書店

文字の文化史　　同時代ライブラリー 83

1991 年 10 月 15 日　第 1 刷発行 ©

著　者　藤枝晃（ふじえだあきら）

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111（案内）

編集協力：アルク出版企画
印刷製本：精興社

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN 4-00-260083-1

目

次

一　殷人の絵文字……3
象形から文字へ(3)　部族標識(4)　動物の図像(8)
人間の図像(10)　組み合わせ図像(12)　原始的象形文字(17)

二　神々との対話……20
甲骨の出土とその解読(20)　亀の甲の占い(24)　神への問いかけと返答(28)　神と人との間柄(32)

三　饕餮の背面……35
饕餮文様(35)　殷周の青銅器(36)　金石古文字の学(39)
殷の金文(41)　周の金文(44)

四　皇帝の文字……54
始皇帝の天下統一(54)　文字改革(55)　篆書(56)　石刻(57)　度量衡(61)　篆書のその後(65)

五　政治の文字……66

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

木簡の発現(66)　木簡の現状(72)　木簡のかたち(74)　隷書(78)　居延筆(81)　木簡の内容(84)　木簡の年代(86)　木簡の出土地点(89)　長城のまもり(90)　破磔の権威(94)　刀筆の吏(98)　政治の文字(99)

六　印章……101

印の古さ(101)　古璽(102)　漢印のかたち(105)　綬(110)　印の使い方(111)　印の遺品(114)　後代の印章(115)

七　絹……118

絹の書き物(118)　文字を書いた絹布の発見(119)　楚の帛書(120)　「楚の帛書」シムポジウム(123)　帛書の展観(125)

八　紙の出現……133

偉大なる発明(133)　楼蘭文書(134)　木簡と紙との接点(136)　李柏文書(139)　李柏文書の解釈(143)　李柏文書の用紙(145)　敦煌烽燧址出土のソグド語文書(148)

九　巻物の尊厳……151

木簡から巻子本へ(151)　巻子本の遺品(152)　巻子本のか

たち(157)　巻物の尊厳(160)　楷書(162)　隷から楷へ(163)
北鹿南兎の説(168)　楷書の極相(171)　秘書省(175)

十　古文書……177
古文書と古文書学(177)　敦煌文書(180)　トルファン文書(184)　唐の公文書(188)

十一　新しい書物のかたち……193
折本と貝葉(193)　冊子本(197)　敦煌におけるペン書き(200)

十二　漢字の周辺……209
中国の周辺(209)　突厥文字(210)　ウイグル文字(213)　チベット文字(214)　日本の仮名(217)　契丹文字(218)　西夏文字(221)　女真文字(223)

十三　印刷のはじまり……226
書物の革命(226)　印から印刷へ(227)　百万塔陀羅尼(228)　東大寺のおふだ(230)　敦煌の印刷物(232)

十四　不滅への願い……240

石刻(241)　碑誌の文章(245)　石碑の文字(246)　拓本(249)
石経(250)

十五　木版印刷……255
石経から印刷へ(255)　一切経の印刷(259)　宋版(263)　明
朝体の実現(267)

十六　活版印刷……270
畢昇の活版法(271)　王禎の『農書』(273)　木活字(276)
現存最古の活字本(281)　洋式の活版(284)

あとがき……287

同時代ライブラリー版に寄せて……291

カバー・本扉デザイン＝松田行正

図版目次

図1　「醜」という銘（拡大図、藤井有鄰館蔵）……5
図2　把手の内側の銘（泉屋博古館蔵）……6
図3　動物の図像（拓本）……9
図4　人間の図像（拓本）……11
図5　組合せ図像（拓本）……13
図6　組合せ図像（拓本）……15
図7　銅器の銘（藤井有鄰館蔵）……16
図8　卜辞を刻った骨（京都大学人文科学研究所蔵）……22
図9　図8の骨の裏側……23
図10　図8の骨片の拡大……26
図11　卜旬の一例（京都大学人文科学研究所蔵）……29
図12　亀の甲（上）とその裏側（下）（京都大学人文科学研究所蔵）……31
図13　銅器（甗）のトウテツ文様（泉屋博古館蔵）　37
図14　殷式銅器銘文（泉屋博古館蔵）……43
図15　大史友甗の銘（泉屋博古館蔵）……45
図16　匽侯鼎の銘（泉屋博古館蔵）……47
図17　伯雍父敦の銘（泉屋博古館蔵）……49
図18　雍父甗の銘（泉屋博古館蔵）……51
図19　散氏盤の銘の拓本（部分）……52
図20　瑯邪刻石……59
図21　泰山刻石の拓本（京都大学人文科学研究所蔵）……60
図22　秦の権と秦の量（青銅製、上。直径27cm、高さ18.5cm、下、長径19.5cm、高さ5cm。藤井有鄰館蔵）……63
図23　陶製秦量の破片（故園田湖城蔵）……64
図24　綴じた木簡（部分、居延出土、『居延漢簡考釈』より）……68
図25　木簡の発見されたエチナ地方の漢代故城（Sommarström, *Archeological Researches in the Edsen-gol region, Inner Mongolia*）…69
図26　チベット語木簡（Thomas, *Tibetan literary*

texts より）……71
図27 木簡の削り屑（Courtesy of the Trustees of the British Museum）……76
図28 木簡の綴じ方……77
図29 典籍。全体（左）と部分（右）（Courtesy of the Trustees of the British Museum）……79
図30 詔書と法令（『居延漢簡考釈』より）……80
図31 居延筆（左と中央とは居延出土、右は楼蘭出土。中央は完型の遺品、左は別の筆の穂先と断面）（Courtesy of Etnografiska Museet, Stockholm）……82
図32 A・B 楼蘭出土の木簡（Courtesy of the Trustees of the British Museum）…87・88
図33 兵士の作業記録（敦煌出土。Courtesy of the Trustees of the British Museum）……91
図34 いろいろの木簡（左は下士官の転職辞令、右上は金銭出納明細、右下は備品の付け札。敦煌出土。Courtesy of the Trustees of the British Museum）……93
図35 署名札と宛名札（『居延漢簡考釈』より）…95
図36 習字（『居延漢簡考釈』より）……97
図37 古代メソポタミア画像印の印影（筆者蔵）103
古代メソポタミア筒形印の印影……103
古代インドの印章（モヘンジョダロ出土）103
図38 古璽 殷代の印（表裏）、「司馬之璽」（拡大、故園田湖城蔵）……104
図39 漢代の官職印（拡大） 鈕、印面（張掖尉丞）（故園田湖城蔵）……106
図40 鈕の形 亀、駱駝（故園田湖城蔵）、蛇（藤井有鄰館蔵）……108
図41 官印の印面 関内侯印、奮武将軍章（鑿成印）、雛鳳徒丞印（王莽時代の印）（拡大、故園田湖城蔵）……109
図42 封印した木簡（スタイン蒐集。National Museum, India）……113
図43 近代の官印。上、信陽縣印。下、行軍第貳萬戸之印。……116
図44 敦煌発見の「素経」（大谷瑩誠複製による）121
図45 楚の帛書（部分、赤外線写真。Metropolitan Museum of Art）……126

図46 「楚の帛書」の赤外線超拡大写真 ……128
図47 「楚の帛書」拡大写真部分図(その一) …129
図48 「楚の帛書」拡大写真部分図(その二)(Metropolitan Museum of Art) ……131
図49 ヘディン蒐集の楼蘭文書(Courtesy of Etnografiska Museet, Stockholm) ……137
図50 李柏文書A(上)とB(下)(竜谷大学蔵) …142
図51 李柏文書(断片、竜谷大学蔵) ……144
図52 李柏文書の紙質(目盛りは1mm。竜谷大学蔵) ……147
図53 敦煌発見のソグド文の手紙の一つ(Stein, *Serindia* より) ……149
図54 九世紀のチベット文巻子本(京都大学文学部蔵) ……154
図55 四世紀の写本(敦煌発見。Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……156
図56 令狐崇哲の写経(石塚晴通氏撮影。Courtesy of the Trustees of the British Museum) 165
図57 令狐崇哲写経の拡大図(石塚晴通氏撮影。Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……166
図58 東陽王元太栄の寄進した写経(Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……167
図59 南朝天監五年(五〇六年)の写経(Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……170
図60 隋の皇后の願経(Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……172
図61 唐の宮廷写『法華経』(今西三治氏蔵) ……173
図62 敦煌文書(1)(上はP.2826于闐国王から敦煌国王への手紙、下はP.2638寺院の会計書類。Bibliothèque Nationale de Paris) ……181
図63 敦煌文書(2)(上はP.2685兄弟の財産分割証文、下はP.2945公式賀状の書式集) ……182
図64 トルファン文書の断片(1)(上は橘瑞超蔵。下はスタイン蒐集、張り子の靴からの復原。Maspero, *Documents Chinois* より) ……186
図65 トルファン文書の断片(2)(ともに張り子からの復原。上は京都大学人文科学研究所蔵、下は寧楽美術館蔵) ……187
図66 トルファンの公文書断片(藤井有鄰館蔵) 189

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

図67 楮紙の透光拡大図(×7) ……191
図68 貝葉形折本(Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……195
図69 貝葉形漢文写本(ペリオ蒐集、Bibliothèque Nationale de Paris) ……196
図70 冊子本(藤井有鄰館蔵)、ミーラン出土の葦ペン(Stein, *Serindia* より) ……198
図71 図62・63の文書の拡大図。左からP.2945, P.2685, P.2638 ……202
図72 絵解き『観音経』冊子(スタイン蒐集。Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……204
図73 ペン字写経の拡大図(竜谷大学蔵) ……206
図74 突厥文キュル・テギン碑の拓本(Radloff, *Alttürkische Inschriften aus Mongolei*) …211
図75 上、突厥碑文残片の拓本(右横書き、Radloff 前掲書)下、突厥文の冊子(Stein, *Serindia* より) ……212
図76 ウイグル文の断片。写本(上)と版本(下)(ともに大谷コレクション) ……215
図77 初期チベット文写本(九世紀前半、敦煌発見。京都大学文学部蔵) ……216
図78 契丹文の石刻(部分、田村実造・小林行雄『慶陵』より) ……220
図79 西夏文仏典(版本断片、天理図書館蔵) ……222
図80 『華夷訳語』(女真語公文書集、十四世紀、東洋文庫蔵) ……224
図81 「百万塔陀羅尼」巻首三通(天理図書館蔵) 229
図82 印沙仏(竜谷大学蔵) ……233
図83 『仏名経』(模本) ……234
図84 阿弥陀仏の護符(Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……236
図85 乾符四年(八七七年)の暦(部分、Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……238
図86 『金剛般若波羅蜜経』冊子摺本、九四九年。巻首と巻尾(Courtesy of the Trustees of the British Museum) ……239
図87 韓仁碑の拓本(一七五年、京都大学人文科学研究所蔵) ……243
図88 漢の石碑(山東省歴城、関野貞『支那仏教史

蹟』より）……244
図89 北魏碑の拓本（五一〇年、京都大学人文科学研究所蔵）……247
図90 墓誌銘の拓本（五二一年、京都大学人文科学研究所蔵）……248
図91 漢の熹平石経の断片の拓本（藤井有鄰館蔵）……252
図92 魏の三体石経断片の拓本（藤井有鄰館蔵）……253
図93 北宋蜀版大蔵経（「仏本行集経」巻首、九七四年、京都南禅寺蔵）……260
図94 福州開元寺版大蔵経の一巻（一一四八年、京都南禅寺蔵）……262
図95 南宋版の一例（京都大学人文科学研究所蔵）……265
図96 元版の一例（京都大学人文科学研究所蔵）……266
図97 初期の明朝体の版本（京都大学人文科学研究所蔵）……268
図98 活字ケース（『武英殿聚珍版書程式』挿図）……278
図99 組み版の光景（『武英殿聚珍版書程式』挿図）……279
図100 三雲仙嘯刻『文館詞林』の版木（京都大覚寺蔵）……280
図101 西夏文『華厳経』木活字版の表面（京都大学人文科学研究所蔵）……282
図102 西夏文『華厳経』木活字版の裏面（京都大学人文科学研究所蔵）……283

文字の文化史

一　殷人の絵文字

象形から文字へ

漢字が象形から発達したという話は、中学校や、あるいは小学校でもいろいろ判りやすい例をとって教えられる。「木」という字は樹木のすがたを写したものであり、「日」という字は太陽のかたち、「牛」という字は牛の頭と角とをあらわす、といった調子である。けれども、この説明はなかなか手間がかかる。水平に枝ののびた木では木の絵にならないし、太陽はまっ四角ではない。牛の字の説明となると、さらに容易な業ではない。通常は絵から字への距たりを埋めるために、隷書（れいしょ）や篆書（てんしょ）や、あるいはもっと古体の文字を並べて、書体が古代に溯（さかのぼ）れば溯るほど絵にいくらかずつ近づいて行く次第を示されて、聞き手はそれで納得させられることになる。一応は納得はしても、よほど懇切丁寧な説明をきかない限り、たいていの字は原始形が思

い浮かばない。ところが、一、二、三とかあるいは中などの抽象的な文字は、めんどうな説明もなく納得できるし、古体の文字も現代の書体と大きくは変らない。つまり、字というものは、それほど抽象化の進んだものということである。いま知られる最古の書体ですら、絵からの距離はずいぶん遠い。古体漢字の一覧表を見せられて、なるほど、大むかしは絵からはじまったんだろうなあ、という受け取り方をするには、よほどの頭のひらめきを必要とする。言いかえれば、いま見られる最古の書体でさえも、かなり抽象化の進んだ段階のものであるということである。

そのように進化した文字に混じって、実はもっと未進化の、象形の原始状態を豊かにのこした一群の文字がかなり長くのこっていた痕跡を、今でも見ることができる。

部族標識

ここに拓本や写真を掲げたのは、すべて中国の殷時代の銅器に鋳込まれた銘である(図1〜7)。古銅器の中でも、とくに古い器には、しばしばこういう絵とも文字ともつかぬ奇妙な銘が見出される。銘のある場所は、器内の底であったり、口であったり、把手(とって)の内側(図2)であったり、さまざまである。ある専門家はこれを部(氏)族標識と呼ぶ。つまり、家の紋所のよ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com